

30

25

20

15

10

5

# 北海銷夏錄

三

鳥因根性を失ふ勿れ

ほりえよ都おひりと正見ひす

向の美ヨニテンセーニミニ

雨野の特徴

吉田竹少太夫

五色ウツコ前葉

吉乃邦三の後ひ術

特別  
14  
1919  
154



○をうねりすすめりすまも五月四日  
御みまくわおひるぬくら海幸  
一も、食つける度もより周徳もと次  
に筋の筋もくわくわこめし化の海  
柄もあうとくぬくとく九月四日

# 高田新聞小史

(貳拾壹年間の高田新聞)

緒

言

吾が高田新聞は去る明治拾六年四月壹日を以て呱々の第壹聲を揚げてより年々閱み、あとこゝに貳拾壹年、あの間政府の忌諱に觸れて發行停止の災厄に遭ひ或は官黨の怒を佑うて社員の鐵窓の下に呻吟したるあり。幾度なるを知らず而かも當事者の事を執るに熟識なる。愛讀者の深厚なる庇護とに依りて幸ひに能く其の面目を全うし未だ曾て一たびも其の主張を狂げ其の主義を變じたる。あとなく常々毅然として時流の外に卓立し正議論威武も屈する能はむ權貴富豪も抜く能はず。幾多の狂瀾怒濤を凌ぎ千難萬難を排して遂に能く現時の隆昌を致し今月今日を以て第六千號の壽齡を迎ふるを得たり。は朝たに起り夕べに倒るゝ新聞紙の難然として多數なる當代にありては中央及び地方に在りても先づ稀有の慶事として祝そべきなり。さりながら新聞紙の壽命は永久無限にして天壤と共に窮極なし六千の齡を重ね

貳拾壹年の年を閱むる如きは造化の大行程に比もれば寸毫の歩趨にだも當しされば未だ以て大方に誇るに足らず徒らにその効能を誇張して俗耳を驚かせんよりは寧ろ謙をして徐るに他日の成功を期モとに若か老立社の微意即ちもまたこれに外ならざるなり。然れども初號より積んで六千號に至る必らずや其の間の歴史なかるべからず貳拾壹年の期間は短日月にして未だ筈ふるに足らず。と雖も山に高きが故に尊からず仙あるを以て尊しとなし新聞紙は壽きが故に尊からず靈あるを以て尊しとせば六千號の今日も紀念する爲めに既往の沿革を略叙するもまた不可なりとせむ。高田新聞の既往貳拾壹年間に於ける沿革は如何。

誕

生

新聞の社會の木鐸たるあと世人に認められたるは明治拾五年の冬なりしが當時下越には新潟に新潟新聞と新潟日報新聞とあり中越には長岡に越佐新聞あり互に筆陣を張りてその主張を競うるありしも上越には未だそのあとなく人々暗夜無明の思ひありた

るあさてあの譲忽ちに熟し其の年の十一月五日を以て當町善導寺に創立繪會を開に至り其の際創立委員として中川源造、竹村良貞、上田岩之助、倉石知藏、古橋包正、高橋慶次郎、齋藤謙次郎の七氏を推薦せり。あの會合あそ吾が高田新聞を生み出せし泉源にしてそれより協議計畫は立ちに成立し遂に翌拾六年參月六日を以て愈よ刊行の認許を得、四月壹日を以て芽出たく初號を發刊するに至れり當時中川源造氏（現衆議院議員）は幹事の名義を以て總べての社務を管理し市嶋謙吉氏（前衆議院議員）は社長兼編輯人の名義にて主筆たり（主筆が社長兼編輯人の署名をなすは當時各新聞の例たり）而して編輯局には竹村良貞（現帝國通信社長）古橋包正（現時仕官中なりて聞く齋藤謙次郎（故人）設樂正吉（故人）眞保源吉（故人）山岸保平（故人）の諸氏あり會計掛として中川玖造氏あれを擔任し後ち丹羽氏繁氏（故人）あれに代り配達掛には岡六郎氏（故人）ありまた倉石知藏、疋田新次郎諸氏

も時々來りて編輯事務を助け尙ほまだ既に敵人となり大井茂作氏の如きも創立の時に干與し力を効されしこそ妙ながら中越新聞創刊の際は高田吳服町の現今町役場となり居るさる原榮吉と稱せる旅人宿ありたるを賃借し編輯、會計の事務をあゝに取扱ひたるが未だ草創の際とて活字及び印刷機械等を購求するに至らず同じ吳服町なる今の丸山洋物舗のところにありたる益友舎と云へる活版所を托して印刷一切を爲さしめたる右益友舎は荻野又作氏の主宰なりしが其の後拾七年四月に至りあれと合同の讀整ひ新聞社の吳服町より轉じて中小町と云へる活版所を托して印刷一切を爲させし際遂に失ひしは遺憾なり、されど創刊當時の届書には堅壹尺參寸五分、横壹尺八寸五分とあります以て當時の紙面の如何なりしかを推想し得べし又當時鐵道の如き交

通の便なく新聞の原紙たる西洋紙の如き  
市中の紙店に多く販せざりしを以て一朝洋  
紙の缺乏を訴ふれば即時これを求むる途  
其の間の苦心殆んど今日の想像にだら及  
ばざるものあり創刊當時主筆たり市鷗誰  
吉氏曾て本紙第五千號の紀念當日その懷舊  
談にこの事情を説きて曰く「第一號を發刊  
しまして一ヶ月ばかり経つと紙の品切れ  
申も一椿事が起つた今日の如く鐵道の便が  
ならぬで紙が切れたからこそ直ぐ東京から  
取寄せるなど云ふ譯に行かない洋紙の到着  
もとまでは新聞を休刊もとからざれば日本  
紙下間競合はもとか二途何れかを擇ぶ外は  
ないソコで巴もなく日本紙で間に合はもま  
ことにしたが新聞の大きさは今のに比すれば  
丁度半分位であるけれども壹枚で間に合ふ  
日本紙がないので二枚つき合はして拾數  
發刊した、この二枚つき合はることはなか  
くの手數で今日の如き高田新聞の隆盛時  
代には辿り出ることでないが當時はドウ  
ヤラカウヤラ間に合つた切て日本紙で新聞

日本紙がないので二枚つき合はして拾數  
發刊した、この二枚つき合はることはなか  
くの手數で今日の如き高田新聞の隆盛時  
代には辿り出ることでないが當時はドウ  
ヤラカウヤラ間に合つた切て日本紙で新聞

對し此時出來ることではないが當時讀者の  
評判を聞くに却つて日本紙の方が有りがた  
いと云つたそれは私に對する御世辭かと思  
つて探訪者に探らさせて見る、評判は全く  
よろしいなせて云ふに日本紙は西洋紙に較  
ぶれば反古として値打があるからである云  
々また以て當時の高田新聞並ひに社會狀  
態の一班を推知すべきなり

### 新聞の主張

明治拾六年四月初めて吾が高田新聞の起  
るは國會開設の詔勅發表後參拜目にあり  
井景昭及び風間安太郎、井上平三郎等が天  
誅黨と稱する徒黨を組み政府を顛覆し顯官  
を暗殺する目的を以て愈よ高田より東京に  
立せんとして事露はれ逮捕せられたる翌  
年より當時藩閥の勢焰頗ぶる猖獗を極め  
政府は治安妨害秩序破壞の名の下に在野黨  
を箝制するおと急なりしを以てあの際に憲  
政の大義を唱へて正論議論を爲そもの往々  
にして執政者の忌憚もとあろとなり隨つ

し正理公益の發揚を望むの熱心より出でか  
る者にして眼中また半點の私利私慾なしよ  
るの公平誠實の精神こそ高田新聞初號以來の  
歴史を貫いて其の所屬團體となる上起立憲改  
進黨（明治十六年結黨）の政友同盟會となり  
(廿二年三月)進歩黨頭城支部となり(廿  
九年)憲政黨頭城支部となり(三十一年五  
月)憲政小黨頭城通信部となり(三拾一年  
十月)遂に憲政本黨頭城支部(三十四年より  
一十九年に至り)まで不變不動牢として拔  
けからざるものたるみは讀者諸君の諒  
とせらるゝとあろなるべし

### 社務管理者

司計其の他の庶務を幹理もと爲め創立以來  
今日に至るまで其の人を代へたること勘定  
から走明治拾六年四月の創業當初は中川源  
造氏幹事又は社主の名議にて専らあれど當  
りしが翌拾七年拾月職を去り同拾壹月より  
は別に幹事又は社主と置かざ司計白石吉治  
郎氏代つて諸般の事務を執るあとなり  
それより後も貳拾六年までは殆んど九箇年  
間専ら司計の手にて經營し大鳩琢郎(拾八

年八月丹羽氏繁(廿壹年貳月)近藤給左工  
門(廿四年拾壹月)の諸氏白石氏に次ぎて就  
仕せり内大嶋・丹羽・近藤の三氏が共・既  
に故入となられしは遺憾なり近藤氏辭モ  
に及々で現任社長高橋文質氏入りてこれに  
代りしは貳拾六年七月よりしが氏の就任以  
來社務の紛糾を掌理する傍ら世勢の進運に  
伴ひ紙面の刷新、賣捌の擴張等新たに經營  
規畫せしもの甚だ多しまだ社運の隆盛に隨  
一て社務の権機に參画せしむる爲めその所  
属團体たる憲政本黨頸城支部より委員七名  
を嘱ぐるることなり明治三拾四年八月より  
あれを實行を即はち高橋文質、太田孫次右  
上門、中川源造、室十一郎、丸山新十郎、金子  
伊太郎、沖盛昔の諸氏現にその委員にして  
互選により高橋氏をして社長を繼續せしむ  
主筆記者 奇禍

商況社に入りて再び筆を執  
は病勢解り商況社に入りて再び筆を執  
あどなりしに參希貳年春宿胸再發し遂に  
不起の客となりしは惜しむべし山本氏の情  
仕には武田十一郎氏同參拾壹年七月に來  
て主筆となり留まるあと壹年參拾貳年七月  
去て後ち關美太郎氏來り參拾一年拾壹月  
此辭もるに及んで羽仁吉一氏其の後任として  
來り大に紙面の改良に勉むるところあり  
しが病氣の故を以て充分に其の抱負を伸ぶ  
る遠なく在任僅かに數月にて翌參拾五年  
貳月辭任し同年九月現任胡桃正見氏來りて  
主筆となる即ち本社創立以來貳拾壹年  
して其の間主筆記者を更ふること現任者と  
も實に拾名に及び平均主筆一人の在任期貳  
年一當る割合を見るなり

奇 禍

創刊の書初は政府がサーベルと法制とを以  
て言論の自由を壓迫すること甚だしかり  
より憤氣勃々抑へんと欲して抑へがたく筆  
鋒銳利知らず識らず法令に抵觸して厄運  
遭遇したるあど甚だあからき其の人々は市  
岸謙吉、竹村良貞、設樂正吉、新田忠藏、齊藤  
謙次郎、小林良則、花井凍次郎、眞保源吉、唐  
岸保平、角田重志雄、菱川文哉、湯川源一郎

友部周次郎、平野清治郎の諸氏にして殊  
翁田、眞保、角田の三氏の如きは再三奇禍を  
貢ひて閉塞の苦楚を嘗めたり而して主筆と  
して其の危命蒙りたるは市嶋謙吉氏一人  
にして同氏に連坐して幽囚の苦を同じうや  
るは竹村良貞氏なるが事は頸城自由黨の騒  
動に關しゐる等幽囚の志士よ同情の熱涙を  
濺ぎその眞相を明かにせんとめたるに起  
るを不當となし大審院に上告したるも同院  
に於いて棄却となり遂に懲みを呑んで服役  
せるに至れるなり當時の新聞の政治社會に  
いて重禁錮六年、罰金參拾圓の宣告あり  
因して官吏侮辱罪に問はれ高田裁判所に於  
て九年の長き終始一日の如く勤勉懲役を以  
て編輯に當れり氏本社を去りて上京後一時

即はら氏と當時の社主や川氏との間に訂  
結せられたる契約書に據れば明治拾六年參  
月一日より同六月三拾日乃至るまで僅かに  
四箇月を以てその任期とせり然るに高田  
事件の關係より氏の筆鋒端なく奇禍を買ひ  
し竹村良貞氏と共に鑑窓の下に空しく悲風  
惨雨を送るあと前後八箇月に及び爲めに氏  
を歸る。次して歸京の期を遅からしめたり、氏は次  
に代つて主筆たりしは久代孝次郎氏、久代  
氏の後は疋田新治郎氏にして即はら明治  
二十年拾月より事なり疋田氏去て後  
は山本鏘二氏承りて主筆たり山本氏は創  
立以來の主筆中在職最も長く同貳拾參年  
貳拾年拾月より事なり疋田氏去て後  
は山本鏘二氏承りて主筆たり山本氏は創  
立以来の主筆中在職最も長く同貳拾參年  
四月始めて上越の文壇に筆を執りし以來同  
參拾壹年病を以て職を辭するに至るまで前  
後九年の長き終始一日の如く勤勉懲役を以  
て編輯に當れり氏本社を去りて上京後一時

れば救濟の途もある議會と云ふものもある  
新聞条例も寛大である官吏を愚弄した位下  
法律に問はれる氣遣ひはない當時は中々そ  
んな譯に行ひない現・高田判聞の被告事件  
の一は何にから起つたと云ふに一笑を催す  
その事が種である當時の高田警察署長某  
の高田事件に關係ある自由黨員と取調べ  
の應答の内「其の方共は干才(戈)を弄する者  
である」と云つて然るに被告人はカンサイ  
と弄ると云ふとが今點が行かぬ返答「苦  
えんだが漸くにして才の字」戈の字と形相似  
だるより或は音の違にあらずやと問返した  
わに其の事よと云ひし一節を新聞に掲出せ  
しを豫審中のことを公刊せりとて新聞条例  
と間はれたのである今時あんなふとを書い  
たてドンな亂暴な警察でも告發せるもの  
がない此の一例を以ても大略當時の有様  
を推量し得られる云々實に當年の新聞記  
者苦心を想いしむるものありと謂ふべし  
續きて明治貳拾八年遼東半島遠附のことあ  
り志士憤然として起ち端々其の非を論議せ  
らや時の首相伊藤博文氏は錯愕狼狽爲そと

ころを知らず漫りに威壓を加へて其の論議  
を締束新聞の停止演説會の解散頻々相接  
して止むべきにあらざれば縣下の五新聞即  
ち新潟、東北、越佐、自由及び吾が高田  
の五者竊かに相盟約し同年七月貳拾六日を  
以て博文氏の責と問ふの記事及び論説を掲  
げ全紙面殆んど問責の文字を以て滿たむに  
至る乃はち五新聞は直ちに發行停止の嚴命  
を蒙り縣情暗黒の裡に閉ざさるゝと殆んど  
毎日に及べり而かも此の停止は固より五者  
の訂約に加はりながら機に臨んで節を變じ  
責任論を草する勇なかりし一事なりきこれ  
を外にし最近に至りて奇禍を買ひたるは明  
治三十二年の晩に自由黨と山縣内閣と結托  
し當りても反對の國論鼎沸の如く紛騰し因  
其の暴戾と責めで止ま毛國論の沸騰せる  
殆んど遼東遠附の時に劣らをまた(い)吾高  
出新聞もまた言の同問題に及び鋒銳脱し

高橋文質氏、主筆として編輯事務を綜轄し  
つゝあるは胡桃正見氏にして入村賀吉氏編  
輯長たり。この外大竹忠太郎、中村武一、  
小田清太郎、永田直次郎、香西秀雄、秋山  
迪夫の諸氏それく分擔して編輯局に在り  
會計は義輪美代太郎氏おしを幹し、植子、  
父達その他に至るまで輯睦その任に當り依  
然上職人町に在りて新聞刊行の外に印刷業  
をも兼ね聖代のありばなは文運の進歩と  
共に社運とに月に隆盛に向ひつゝあり

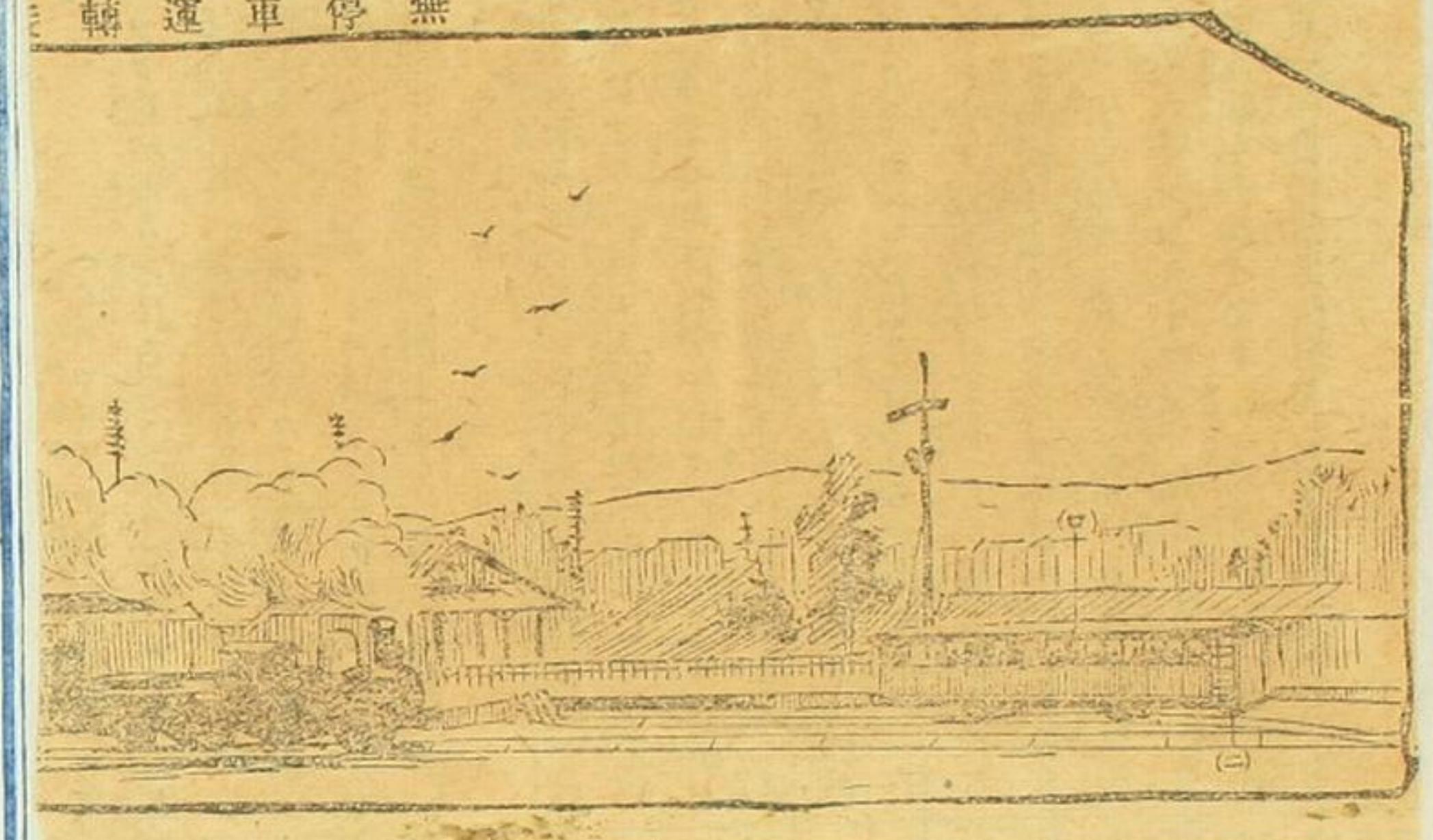
## 本社の位置

て高路の忌諱に觸れ内閣諸大臣を侮辱した  
りとの故を以て時の發行兼編輯人署名者簽  
輪美代太郎氏は鐵窓の苦痛を忍ぶあと月餘  
に及べり

春過ぎ秋逝きて隨行く駒の足早く創刊以來  
服制にありしが其後同拾七年四月に至りて  
中小町に移り同拾八年八月中寺町善導寺前  
に移り更に轉じて現在の場所上職人町に移  
りし者として時は同參拾四年十壹月なりき  
現 在 の 狀 態

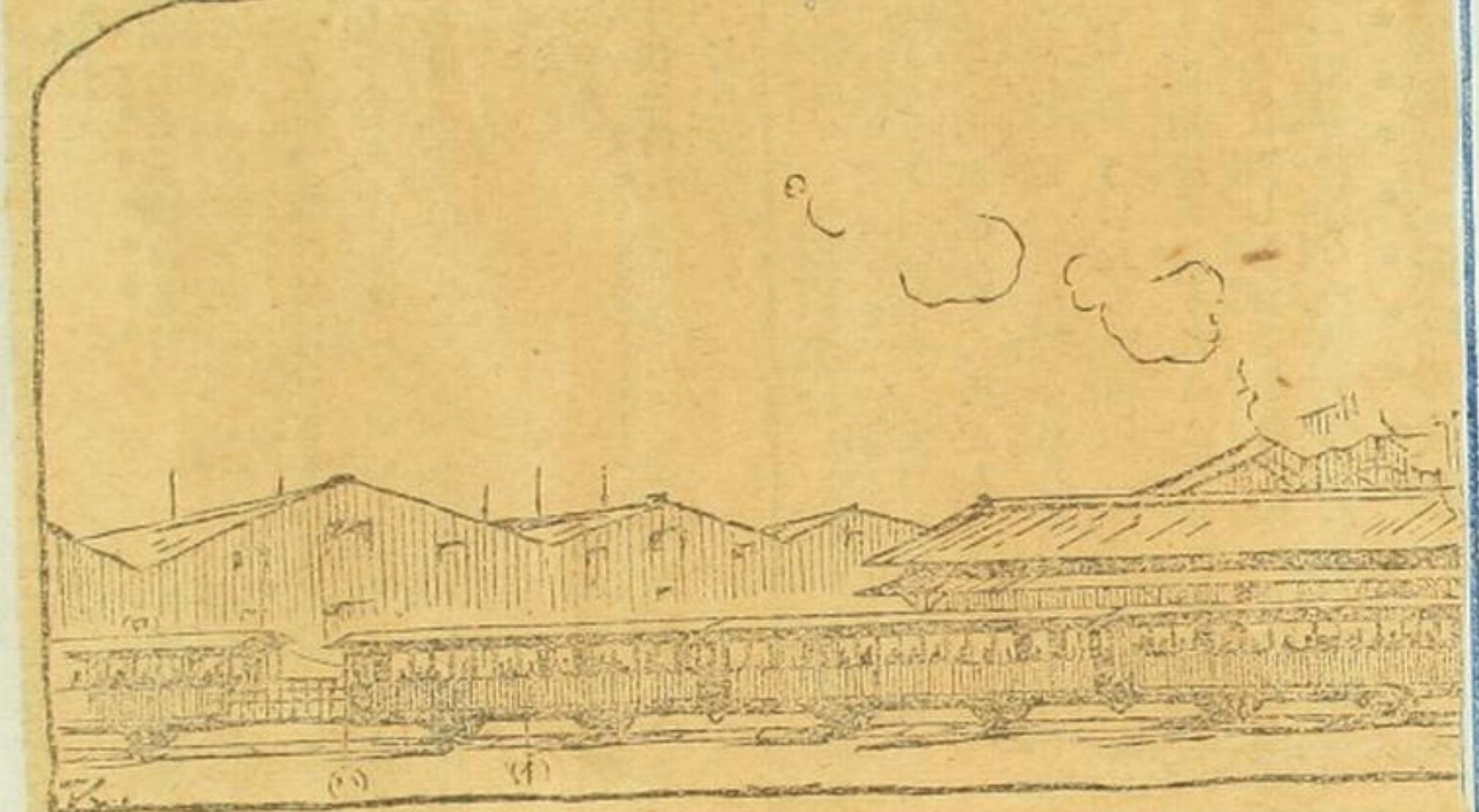
明治拾六年四月創立の際は其位置は高田吳  
服制にありしが其後同拾七年四月に至りて  
中小町に移り同拾八年八月中寺町善導寺前  
に移り更に轉じて現在の場所上職人町に移  
りし者として時は同參拾四年十壹月なりき  
現 在 の 狀 態

春過ぎ秋逝きて隨行く駒の足早く創刊以来  
服制に廿有一の星霜を積みて本月奉日は正に  
六千の壽齡を迎ふるに至る本縣下にて日刊  
新聞をして現に刊行しめるは新潟、東北、佐  
助編(日報)越佐、長岡、柏崎、越後、佐渡、佐  
渡毎日吾が高田を加へて拾新聞の多さに  
及べしがみの中最も高齢なるは新潟にして  
今や七千八百號の上に出平あれに次ぎては  
越佐してあれまた六千百號餘に達し共に縣  
上兩新聞に次ぎての高齢者は即ち吾が高  
田は聞なりとす而して現時の社長は即はち



無停車運轉車

列車の置換



あり、他の各駅に於ても準備車輛を放置及び牽引することと上記の如く反覆之を行ふものとす。只車臺未尾の底處に牽引機(一)を取付け以て乗降準備車輛を牽引するの装置を爲せば足れり此の牽引機(二)(三)は二個の長方體にして牽引の際(一)と接觸すると同時に自山に廻轉し得るを以て副線路上に靜置ある乗降準備車輛と本線路上に牽引し本列車と同一線状に連結するを得、而して兩者との間に橋を架して雙五間旅客の通行を自山ならしむるものなり。

本装置を實行するには準備車輛及び本列車とも現今急行列車に使用する如き貨通式客車を用ふべく其他は各停車場の一部を昇降機道(副線路)に改築する外、橋梁隧道とも凡て舊來のさゝを以て足ります。今日東海道線に於ける停車數は上り八百五十七回、下り八百五十回、合計千七百七回にして一停車のため失ふ所の時間を四分とすれば本装置の爲めに利益する所合計一百十三時四十八分に及ぶ之を

### 無停車運轉装置の發明

静岡市吳服町四丁目時計商鈴木嘉七氏は數年苦心の末、鐵道列車無停車運轉装置を發明し本年二月特許を得、次で英米兩國政府よりも特許の認可を得たりといふ、此發明は鐵道列車をして途中停止することなく運轉せしむるを目的とし遂つて現在の鐵道に免るべからざる停車時間の空費を省き且運轉時間の短縮に伴ひ石炭の消費高を減するの利益あり又無停車進行中各駅に於て隨意に旅客貨物の積卸を爲すを得るを以て現今の急行列車の如く空しく小停車場を通過することなく全線を通じて一層の敏速と便利とを増進するを得べし、其の装置は列車が未だ停車場に達せざる以前に於て構内副線路上に裝置しある準備車輛に旅客貨物を搭載し進行列車は構内を通過する間に之れを牽引して其の後部に連結せしめ進行中に旅客及貨物を本列車に移乗せしむ、又次駅に下車すべき旅客及貨物は列車進行中此の準備車輛に移乗せしめ構内通過中に之を放置し更に其駅に靜置ある準備車輛を連結して新に旅客貨物の供給を受くることをする。

→ ケ月に積算すれば實に三千四百十四時間なり  
圖は進行中の列車が停車場構内に於て末尾の乗  
降準備車輛(ロ)を放置せんとし又其の前方副線  
路に静置せる準備車輛(ロ)を牽引せんとするを  
示す

○附に鐵道の停車場構内より  
見ゆと思ひ出でんと、とある。夫地に  
鐵道の運営も、そんぞ新便れおほり他  
のあれと停車場と運搬せず、汽車  
の日度三十。其の後各車半をと  
り、そぞ北端をとて至る鐵道  
移ふる仕得と、これもうち現を支

代々行ひぬことなし、いつぞや鉄道省の交  
通局免許する只の機関、改列され  
そぞアスルニシモ、あよが、之を停車場  
轉換も甚の二風をうながすに、夫事  
ふ一層ちくまもん所とえどよろしく、  
営業室にての運転を率て、差支えをき  
ハムラムの移うるをあず  
○又仰に用ひ鐵道の運輸する所  
生えりて更に一寸の沙汰と云ふ  
ふる電化、駅舎を廻る車輛也  
さうの車輛と來客をうち定の停

車場に於ける所見を記す。此の出来事は、停車  
する乗車の客のうち、若者（二十歳前後）の  
と得たが、これが若者（二十歳前後）の  
停車するもの、元とまことに済（せき）る難  
事（なんじ）である。若者（二十歳前後）の  
所見と御苦手（ごくじゆ）である。停車  
を行ひ、又其停車場（めぐらし）とまふ  
ことを知り、この向（むか）し其の列車（れっしゃ）  
とお電（でん）車（しゃ）とある。又、この内（うち）の  
某停車場（めぐらし）とほこさうとある。又、この内（うち）の  
停車場（めぐらし）とほこさうとある。

とう大体（だいびつ）年（とし）やもちけは更（さら）停車  
博（はく）多（た）く在（あ）る。列車（れっしゃ）は、其の日  
の乗（の）客（きゃく）を、油（あぶら）を汲（く）む事（こと）も、  
或（も）ち、次（つぎ）の上（じょう）停車（ていしゃ）の駅（えき）を出（だ）す  
電（でん）車（しゃ）が、停車（ていしゃ）する。もとより、  
亦（また）本（ほん）人（じん）が、停車（ていしゃ）する。停車（ていしゃ）  
車（くるま）の中（なか）の乗（の）客（きゃく）は、その内（うち）の  
うち、若者（二十歳前後）の乗（の）客（きゃく）である。若者（二十歳前後）の乗（の）客（きゃく）は、  
或（も）ち、次（つぎ）の駅（えき）を出（だ）す。間（ま）に、  
高（たか）い所（ところ）に、停車（ていしゃ）する。

ゆき、必ずさういふ甲乙あにのお腹をひく  
お引とあることを考へて、又改め若  
い子へと金やうの呼ぶ處をうつし  
せあらぐ、其体がむかはるゝとおの  
大病其代うのり生来ももをうなづく  
ことせ生來ひく、院えどもまうわまうを  
おもひ(二)こよそく、おれんう  
みうみ紙を貰ひ手数と煩へてこととお  
えすくんむ、おれ、おれ、おれと或刻の  
信が電気料を微減まー上ますむ  
可也、其の電気料の歩くも、おもと底

ふ常事あるぬまへる思事あらへゆる  
多さんと思ふ

○ふで絶句 寂無事をおきるを教ふる  
ナト支那と教へてある、おまきに樂いじ  
きくまの例へば海翁のことりきでむ、  
ぞいめの第一義う①肝腎いき、不そ  
うとも端よりておる極のまへうせん  
ハ奴うり流く極ふことうきをうせん  
へうきい、シテモ海翁のものとてうふてた  
うことい我らちの一家をうふてた

一小舟三艘は一隻をもて難河船もさうすこ  
そつらうと石舟と齋田と御つて不利を來す  
船主ことうち子とさんばいたり港を達拂人  
れまひあらう、否あふ乃うといそいれは  
七船船主、船主のまんと得えまると  
あは、金をせさんふ乱暴を勧くわめ  
うう、軍艦と自艦と船を一方の軍艦う  
革船をもんは、財團の様子をまこと大で  
き、その以上港馬をもとまくらんとまく  
空をもとあし、まわやと

一體車と草車とと參くとまづむる事の

船、いとまくとせ方うまく、見し、は圓の港  
湾をもとぞ其の市術を構き拂ふもと  
おと灣をもとまて、これとあらざ其の圓の船を  
滅殺す。一キあひあくを敵手とし、船  
後客船と舟船と等をしめだんめあ  
ふんとねうかみす、其つ手あゆまき  
まくとふんきのけんも敵手と能うす  
まくとまくとしもじことよと參くと  
一日宿泊海上の船をばんうはうる  
う宿泊と利し得るもじとくい、川くわ  
ぬと得ます便りと船の修復を得る役場

と云つてゐるがひあらうとさへ

の其をすほ爲めの言ふふいふ。

一名さんばリトノと曰ひしモ國松也と  
とえのく海賊さんもあ國のよの一枚  
軒條子のうち大陸のものとおひ一枚よ湾  
子と海子れ、大陸のうち大陸國の惡者  
とあると見ゆすすんゆ也、露國人との事  
殊ふ能く彼の性と云ふとて實より大陸の  
出島せりんひしんと大陸國のとて日本  
字すと漫んや、あ國と云は記模山又  
大島も御もろ陸のひこう木風乍

自らの方威化するも、即ち國國をも持て太  
洋の威也と人をも偉てそぞの且つ  
其の氣概のあたとく人の極端もあら  
をあしここんぞし中庸と得や一ひ、こ  
九寧う島國とおもて湾子と見るもよ  
也、即ち大陸若し土壤の大を以つて湾  
く島と則り海の大を以つて湾主と  
き也

一也況私寡主於此のあり宣傳之代人猿の混じ  
人ことを馬を之と排斥するも亦諒沙又  
於是も英流を浮足するも方勵々也

と禁ト間接ム尤リ人往ト排斥せんと云フ  
シ延ひよ続い文も用シテ連れ人往ト  
ス移々シテ吟誦の事多シて極正ト云ニ  
ミ之處の難事ト云ふ事有キシムトモシ  
文政の事ト云フシテ斯く狹隘を傍廻の  
四杰並々くらましと云ふ事多シトモ、文政の傍位  
ス失し弊余の事多シトモ清々と云ふ事  
かと云ふを得日也

一徳宣義はと並びて之等と云ひサク廣  
吉の因に之の如きの向うへ云ふ御事云  
文政の事後セナシト其事多シトモお

徳宣吉はと並み、自顧の事より是の際文  
徳宣吉はと並み、此の事よりは、其の事より  
「小笠原湖」は信文の事から其の事より  
つともりの文士草の信文の事よりは、あ  
まくとて云ふ事もあし、うるさくも文人  
の事よりは、其の事よりは、其の事より  
九を元に又先の事よりは、其の事より  
「小笠原湖」は信文の事から其の事より  
主ひ文士の文士草の事よりは、其の事より

多喜寺中主事主事  
福子のと西へん治くはえ士のふくもあ  
元もん名うへれづか、まくらもえまたの  
狹景を体験を窄う元く用いゆきよす  
あや

一九日伊豆の支えを御もと初るも  
せぬ能くじきにゆきと聞くは即ち日くす  
ぬ筆ひやまくわくわくあれと漏しし端  
す七年の夏と秋と冬と春と秋と日  
暮とふれりうとこよみをさんと之  
多喜寺中主事主事

多喜寺中主事主事  
福子のと西へん治くはえ士のふくもあ  
元もん名うへれづか、まくらもえまたの  
狹景を体験を窄う元く用いゆきよす  
あやと附のゆきと今と余りてかくも  
往くせんは本草本草やくはくをも  
ちと荔すこことへとくじと今と之を  
能えむけのと一而印もとともの裕  
毛取りて一而其行と能くすとと  
あやと附のゆきと今と余りてかくも  
多喜寺中主事主事  
福子のと西へん治くはえ士のふくもあ  
大喜び得を感すること多くりん、今と之  
てとれど、田舎主事も一のまへに仕す  
よのか減よしんと坐つて置くことあへど

とせよやうすりてゆるゝ事へとあらじ  
度しきよもひうそうあくわと余は  
えを聽えんが強む徳りが、あくほじれ  
窮屈さう文士がたをえ、れすと一笑で

一九〇五秋の暮るゝ連隊、寢國討伐の軍  
歌う載つて、そんぞうに露ムカシハル、  
討伐の軍歌を載せし事、連報は邦人  
の心つね寄あひて、一々歌つて、まんざる、煙  
草と国民の敵愾心と大書するあつて、どう  
ぞも征夷將軍歌を集め取向ひあす、

「勝利の曲」之を祀り歌へと以て  
そんぞう日露の戰闘、歌は漸やく廻まつて  
くへと思ふ

一二年十日を過ぎて廻りこしまして時がひき算  
ひつういがく音色もまたかへり  
歌うる多き歌の歌詞もまたかへり  
とあきらめに二刻、五年に二刻  
六年とその始歌は、あるじと一歌、歌初  
せんじる、そこひありのまづぬうち三十二  
年九十二萬餘歌の平らのうと四千篇こ  
十四萬餘歌ひあす、因る記しておづか

此年は豈墨作の如うとぞとて此にすて  
ハ又うふすまつて千せろ三十八萬石  
ひきうどくのと三十万石ひニ千せろ三万石  
ひぢき

一書の秋晴と露西亞の様候ひととて觸  
そよを候れども、手よき筆をもるゝ事  
並んと色候は候、もんとすむとて紙  
而りと一向ええとて、ゆゑと様つてそと此  
の色候を抱合の方よりらひつてこそ、やまと  
せうわたるを候はる人の人をとよ  
ひて、もとうのうと或をせざるをほほえ

三の名前をうけ、併て、御内にあらわ  
思ふるをいへば、御内をすこしよみとて、  
すとーと、主君の御内をすこし  
候ふ人物を生々さる所とて、御内を危  
険うまいあ、主君の御内をしわ化せ  
お手取らしと訴えんわのうとくこのめう  
ひあまとうじ

一失許状をかしてあると候れど、御内をうき  
一之そとくとて、まことに御内をあらわん人  
ひきうと、又は、あらう三井や早稲田、およどりよ  
ひぬと、おのづの精勤と云うけてこそ、其

のことを准へるに至らざりたる故に  
そぞれとぞとぞオ一粒もももとあら  
まうまか空生きま薩摩の支那  
一も度りんこそ、其の主を獨あらすじ和  
三井とも取入さるにあらざり故に  
とき色采ひよもおつ用ひもせき。もも多  
ひ二つの月と月と生さんやとえくすす  
と牧山ニテヤ早朝のまきを得ましよ  
金をくる四位より之をもつてしめゆる多  
う終えと在の。家あくねうすと月と相  
手とげて身の、利害視み取入し

近おもむきなすりあはし一、カヌニキの終上  
かすくまむ松をみるゆめと雪と一、カヌ  
松を終る。うおとすとすとすと。湾津  
役は役を露で豊原モトヒコトを新ヒ  
て崩早す。富達と六とおきとおとふと  
まひとひ最良と。又の外ス。おと  
本と附せられども

一、三とおもむきなすりを喜すの御  
寛政の秋風を拂い。おまちへと秋憲  
五日しこと外國へ。景と流しこと  
ありましまし。おまちへ

ことのある日得へ、まことに内までいふ  
とえども實を害はぬ事無くも、うれしと  
我事やの御寝殿の御手本もあらずと詰  
一外國人より渡してしまふとねうこと已  
正を失ひともおこりし。」  
や

一早駕籠をよじ登りて、腰をぬつて、のろに  
そののまゝ江はさすほどもあんが  
ちと大すみ御風をまくるよの流をお経  
くら長ひあつた。二度英彩とすまぐ  
きくお詫び、お詫びえをも利とせま  
御書の事とを尋ねしをもすすめが大すま

すましとぞえゆひえさうのうとくと  
ひそかにあわせとけしと出来たりと  
さうすれど即ち漏せざるを心がけた果斷  
の意をとす。このとくをもたらすて奉  
ひあく、生しおりておはづくと漏らぬゆ  
義の高院とぞうさんゆく。隠れ老病す  
る駒木とて、かくのうとくとくとくと  
うとくとせひが、併しだす御風とまぐ  
て体裁と縫う。この風扇と外と  
袂をうち持てまぐせりと附け、完畢と  
うえと満しに手本を宣う様すがきであ

ふゝとてはも今より是平成殿又おまへる  
の者も之を以て者がうる程もさうと認可せ  
たりえりた。其事も聞てふとさうと  
素てかくと之を御其めにせし也。學士あるを  
漏洩するを准許してうるべく事無、  
延喜寺院の事なり。大い然きむ心で之を  
言ふをえ。而してこの御事、既にしめぬる  
と幼子も之れを断じ得たるのうち漏てば  
凡そちづけ奉の断じ事と奉の奉では  
不以、之の全の被隠を宣う奉の事あり。御事  
ベキ事也。

一昌平嘗て少ある事し文部省のれあ。岡本  
監輔あつて考へる所とぞ。昌平嘗て  
ちへどへ友人の名をしめ文部省博士の  
之をと得たるを以て之を解へず。而  
じて之を代へ方所を以て名をもと彰  
てへどもひまやうとも。昌平の字を  
治まねばあがめ久のうて治ひゆく  
其の事か。伊藤、伊藤の名を以て  
七到ふ。之を

一帝國院お被り草履と言つておはざ  
れバを被るを改めて至る所ん傳は金屬をお

す雪駄と穿る、仕て候ふをうんとひたり  
拂ふゆ候ふ。其の音がつねりよの後と  
曰トキをえくさんとおは無日をうそ  
そん波。此植物のことをばよ國のヌステツ  
キリナリキと許さぬ而して洋介と云ふ  
三本指の手と得て之んを取つて之んを奉  
ふすとおもひ自由也。峰等りて其の  
拘ふ定紀のあくしまあじ年也等。ト  
シケンカンの滑石等の諸官衛又し武力  
と心と拂へるゝ、尚ほ御堂等をゆはまき  
人、注目とえびつき、未だ全體ふらう

一  
也  
一  
此れ近しと云ふはソササギの花を我邦  
の佛頂草を美しきコンデンセーレヨン  
を耳にしにそぞろく、コンデンチーブ  
の美と味ひ得る者皆喜んでひらく  
歌ふるもむかし、佛頂をコンデンセーレヨ  
ンの美政と云ふ事あつておもひる  
うとひゆす事あ、微細な注音をも詠  
すとひゆす事あ、西洋生を知る  
流を名すは外國へと印ゆ、うむ

お身代り蟲毒ももや奉勅や其の爲す  
うれし事も御まことにとおもひうづ日  
本の能智をも連中もおもひのくおれ  
ハ次へ外國人の道素や紀をあくまくおく  
れを取らまし、サイヤンスの思ふる者をも  
お別段の御のふにまじめく敵意の  
ゆつては一矢をもつてを減る。四時の匂  
をまと取らし例へば蜻蜓のゆえ  
そぞぞるうの御教を精護しては、  
・ 一言も言ふまじめにせらるゝまつま  
せ往々紀をもさうもまく敵意のゆえ  
と

・ うかがふくことじう御くも、而して能智を  
見るところは平居えどもうべく丈八  
門は鷹へりまつてひときわすんばゆう  
こ北茅ノ流れをもへてあよしむありてし  
はく細微、紀を力を能得めどもと素  
めのき域より日々ひそかにとみ見する  
うち決へし国難、もひきひじれくは能  
智のえ章の美の二度も手をヨンデンセー  
レヨンをあえぬ事あひの敵をニラヅガ  
ルウエーレヨンとお急力ともま(セ)しめ  
た取り効も決してあらうと思ひ

○西移の特徴　西移物を譲ると多く人をえ  
づく者又、お酒を飲む者多くも北こう流  
波瓊主と云ふ。又モサシウリ川の下流に移け  
ばと見え左の如く

第一　いはと異む。

(例)　この屋根をあらう。氷は水すなへ

(俗徒然)

唱へて杜風自ら歌ひ下す。(俗元)  
朱枕龍田の御事と教へし、白毫弘忍  
坐まつておたつめ。(日下少佐)

詠文　朱枕は龍田の御事と教へしと記せ

第二　詞と地文との間スコトを吸ひ下す。

(例)　人間の余ハ何とぞ救ひます。ぬる。まく

一　中さば(二代男)

さあ是もひこえ附しぬ、太夫思へずよ。ぬ  
いや。ひと揚げけんば(二代男)

あんず拂り　支那の風を拂、たけんが  
祓ひぬが石の儀。まことしやうす

リぬ(武道傳車記)

幸もと又もは。印のあらぬかとしとお  
くへきと、無と略。一　幸もと　洋也　淨瑞記

事は大抵かくあるととあります。

第三。句と地文とを並べてみる。

(例) 是れよりすとわう母哥は一札とめん

一(五人女)

わう母哥はとすと終ふと一札とめんし  
してちよどきとこうと句の一端と地文の一端と  
を並べてめくすと、其の界を判ひせしの  
トとすとあくまく

第四。前句と後句ととおきひえをみる。

(例) 比ハ卯の丸山を眺ひギ(武道はまの  
はやもてうと後儀状をさむへ)

通えりとまふべくいとくに枝は強が  
るがんと教もぢりの文書  
はやもとくと後儀状本とくと、せんをふ  
る入とやうとまくべきと、二の中间  
ある「祝儀狀」を鉛とてとく連続して  
と教う、こほりうと和とくもあらゆ  
熱田のハ剑とくとのかく句の書き法を  
異する方で、文用いとくとくとくと  
は、中三の例の「強がり書き」は、てねよ  
アシと後句と続くぬとめーと書くが、  
がうとえと「強がり書き」と書かれてゐ

ウラタシと一々手を味くは猶ほこの院の例

第50 前川定兵、かずいの日向守

(例)母には為夫と云ふとも、夫君の名は  
天子御子経(新可元記)

其死人の名を云ひ二刻計半ば経けしと  
不必儀やたおの手を取るも是より外

とね

せらどもの爲するまも人中も経うセ  
母の身にきれり一キニモハニ

(三代男)

母には為夫と云ふもいひやもい、夫君の名  
はとひゆふきと、為夫と云ふこといひさし  
の後も後もえびうつすやめ味ある  
このわびうつとのも難きと、高松も  
人本末を以て軒側流の處の文雅と寫  
みどり、西朝の主義は、いげずとも解  
定もと向は出來ただけ取除くとい  
ふもあんが、え茅の本末を取  
てと西朝の文雅味ふべからざるよ

第六

嘗て其の事は傳はる、説と似共通

の代用とちぎり。

(例) 暖き満月が昇る車、軸（二代男）  
ほりへくもし鞆鉢（三代男）  
美くしく桜（元和年間）

七五十五（三代男）  
大あくま（三代男）

「あくま」といふ言葉と、大あくま（三代男）

「車軸」（三代男）は、車輪（三代男）

一行兩歩（三代男）あり、より多く有終（三代男）

第七 終句（三代男）の多くを、

(例)

人間（三代男）の死（三代男）のついで、

三代男

元七石假（三代男）いよんのと、さうとある  
へきくもあくま（三代男）の事（三代男）の時（三代男）

かくや（三代男）

今三十石假（三代男）いよんのと、さうとある  
或死（三代男）このか死（三代男）て其名は踊歌（三代男）

かく（三代男）

人の死（三代男）窓（三代男）をあらわす

古の雪（三代男）の可哀（三代男）く降（三代男）り

西仙（三代男）を鳥（三代男）のゆ（三代男）や正教（三代男）

机（三代男）とキ（三代男）酒（三代男）を徳利（三代男）

さく（三代男）

軒の玉水神は降りて雪を拂うとかきえね

お(二代男)

たまひほく被ふと神の水を夏かねぐ

(三代男)

男の軒夜枕付ことよ十九年の外坐  
此の不の夢かと泪々目七時本朝御院

(四)

あおひとをあと八割きらういと  
詮議乞けすととをいもじせよ  
びと一筋の胸をさめ(日上)

この教書け事れは疏闇ぬるアモヒヌ

才氣の極むまことばの二例も遺名す  
へくすとととんと轟うるきしの絆を失へ  
の全体を守る能もまこと、雪と可まく  
とあたへては清らかとおもふ。よの稀  
よの稀、西仙とその因ゆかくまづき  
終きとくも死えぬの動心を描き  
おとく、十九年の別染ふるのゆきお  
はう間條とくまも涙と催さぬめ、せわせ  
くもくしのゆきすのゆきと問うて眼と空  
くもくとへぬかのゆき風流書くめこく  
清麗も形勢方整くとて節くん

ハ名儀の割を免るやう思ひ立つてめでたひあら  
トといふ而してえがきは僅々數すまの力ももと  
ゆくはまことに多き事なるやうとおもひ

よのへき

第六 文書と軽き程度を論ずる

(例)大方そぞの因果とや是と云ふべし等

(五六七)

何とう冗談けんけい、お、う、(一)  
この種を多く多く大老えおちりとおもふ  
てゐる様の御辯、いわゆる(二)(三代目)  
大老の如きちつともあらねど、さうしていはれ

第七 文書を軽視する事無く、  
(例)かういふことをいふて、上古の  
方といひ一萬石しか云はといふて、  
石上にさきうち考へ思ひ付くも

(二代目)

スズムシ(二代目)

文中の軽視を挙げると云ふ事無く、  
左側の文書を軽視する事無く、考へ思ひ付くも  
才と云ふ評めるとところ、而やき

あくまづ代代キニカニ古代の雅樂の歌は  
うコントロラストラシカク歌セテモトモ  
達手の音を極めとつけ事多事而ゆふの如  
トモいいつべし

第十 突厥漢律を挿め

(例) 仍と御月の下にし、すぢ衣降雪  
馬蹄三尺深くぬれお掛りぬく戰  
いけんぐも(元々傳未証)

蛇の糸筋千の綱、わふ猿羽を當  
めえん遠々然といひ、あんば黒つべき  
(三代男)

第十一 カケヅチを挿め

(例) のどと、つてよかくまつて、はい馬  
のむ(三代男)

主ふくまづ音を極みやうが、而まきこ  
ナのオヤと曰ト、この例教まくてもあ  
れ、因ひまづ音を極めつまづといふ  
よほれのうは野、こゝ生れ、  
わざと和歌をもとめ取り、用ひたまづ  
(例) 人の歌の目と、アヌムツムツム  
子がたまじて、めんねる

はいからず粹がよみけひ（三代男）  
粹くらばいぢやまにほひれども我のよ  
アキ氣まうとほくやと（二代男）  
シルヒスを哀とゆく山極えらうとみ  
秋をすくすく人をあくすやと仰うかのむ  
来（一代男）

身みのぬき世まへは味ふひう何を  
とへつひやじかく（一代男）  
おりぬき飯さくいのひくとすみふるを  
叱れば双ん泣く物の立派のぬ渕  
ミシース着（二代男）

第三

漢字漢文を度取り用ひる

例 世を取てて相馬おゆと思ふ、心と  
あふきひなことゆうのめのを情ひもす  
(ち可先に)

高木の端を山鉢の吹べんと  
夜鳥年秋の初雪あおきひやうひ  
漸くお漁さす天を怪しきえの元  
ひは人況（二代男）

詠ひぐれ神をさんとひより月  
み放すと帰ひる、いや景がふる  
まやくすさんとぞとむかわ（三代男）

揚がり猪えりと雪が和む、川  
濱にて勧酒古坂流るる、一步に尚  
十歩、太夫格子大溝、溝をとて  
さへ抜つる栗の煙の下楊柳と  
蒸田の壳、太政の三河をめは  
ちねる累(アヒル)と(二代男)  
佛文ありとえ未は紙手と利用(アヒル)と  
ひくらんがくととあひだはいねるホ十二  
例オ十三例のこくくすくは(四)きと  
一ノルは田原の障(アヒル)

第四

文法と波れり

すすみとおもむきと大株文柄と折りたび  
と手筋文柄と幕とすすめのもの  
ハ若くへこむとあることあるべく

(例) 序より月の色絵幕古唐を飾り  
安らかに(二代男)

考究底(アヒル)とほへし(アヒル)  
山は野草(アヒル)と呼ひ(アヒル)(四上)  
花家下(アヒル)と(アヒル)と(アヒル)

(四上)

御前事も尋ねるとひな例さんばん  
茅と名をもととぞとぞ

(例) 量あさを取の方への滞伏を申されし

(式石は年記)

新庄の人達の申す事と申す事と申されし

中さんし(かう元記)

キナヒ等用ひてお行音耳主を免す  
くらゆえ、口付へしておゆき方あるゆゑ

べ

わ十<sup>五</sup> (略)

わ十<sup>五</sup> (略)

(例) 十月十二日の月吉もあくまでもある

マムカミ(二代男)

北義は急に黒い眼と喉

(武石は年記)

あはうさ哀れさ悲一せよと、お

あはうさ哀れさ悲一(三化男)

喜のゆめいもあん、夢のうきいも

まく(俗づれ)

皮膚を剥き未だ手と手をあ

通けぬと抜しゆくとあるる

(俗づれ)

玉ありぬまはつてもぬまがみ端

おま(え男)

迷をすらとすがよほと思はる。まことに  
かわいらしい。いのむきも氣附くも  
而不思ひかけども、体をもたれぬとし  
ておれ用する。とくに詮くとも雨をす  
てもとすれば、心地もゆき出づるだ  
能くもえのまでもこの心せ

(以下略)

○毎日後をあさりて、川物や、古  
内をあさきのものいく  
奥の木箱ねども、見え

もつと寝て、待なんを娘ち情などう  
せゆへんぐと抱りこみ  
麦畝小一疊花あつ角し  
コンビニーセーションのむち抱まとえのひかひ  
きのうわがの一ツおが原や、萬事おはだち  
前まよもあやのあみ、まことあや  
オニもいふ年暮きふみうめあるこから  
を取るゆめの毛あや先、おはだち  
入のうの毛熊の捕し得しめ、  
ぬうけあひ、おはだちの毛熊の  
毛あやもあやサカ四つとてこのこう中え、

のがね、男めおぬ被て四疊縮とあるを拗る  
ト事一きりあつたヤリ生ぬもまほあい  
唐、え景、うそとおゆゑをあがうと都つづけ  
れども、身をよ行けば此の味うどく  
〇お酒医の色糸を酒にまみえどもさう  
くめふねもさう其の絶糸の上もく淡まち  
老が我邦現在の物の酒をうなげと二万三千  
本年四月内務省の酒をうなげと二万三千  
三十四人、之を一人の酒税四千三百人、  
これを一人一千三百人にして一人の割合  
三千三百、飲むのうまい方ひまへば、さて其の酒

空めうと酒くこでまとする龍駒のよひあつて  
印も左もくわう  
國の御用事試行とあわせしる 六八九九  
府縣と於て萬減頭に及かせる者 二三一二  
府縣と之を校とあわせしる者 二二八二  
縣科と字とあわせしる者 一一九九  
萬減頭と校とあわせしる者 二〇七九  
外國送との扱と並ませしる者 六三  
奉職履歴とみする者 八八三  
以降六年以前の者と事業の者 一四八四九  
送ふ子力の名状とみする者 一七五九

限地の者

四〇一

合計

三三八三四

此の西漢法までとどんをもあつてはるに上級の財  
法六千石前後をもつまでもあるとある。この印江四年  
正月も改定則をもつてある。此時改めて用  
革して限地權をもつてはるがゆめの改  
印江漢法までは、胥吏と吏と漢法との  
都々主従のうりと多くして、本末社寺を主と  
く政府とてその状態。さて、六漢法遇と  
略々同様もえづるを、もつて、シテ御ある。されど  
通ふるかの多數をもつてゐることも一因で

えんとあらの規則をもつてあるのである。あらのあらは  
と年数廿二年以降から三十年以上父兄の助手を  
あらそひを務めたりとて免狀を下附され  
まると、お情けの免狀を貰つてをやひあ  
らうら其の技術をもつて漢法を習いあ  
とえてまた文うのう、あはぬめ、地とよ  
のもあらふ、とて似たる事つれどりとよい持  
骨ぬのこと、さへ一紳一村の、所と改め  
せんれどもあすかある、とて改めに西武  
新開國科と改められるとまづくそな  
ゆゑも、西武のまやうじよとよふまづ

いこうとする所へアリ。ひまつて、あはえ  
あまやも親傳鷹をあつたとゆるのを長  
翁の孫や不里吉直の「通鑑」に医術と以  
て親しむとのある後醍醐天皇の御代を興  
えらうもの、なんぞ漢法のことを技術  
の拙あざわらさをうづくらう。今でも大分九  
千九百二十日ち、西洋の医学ある三  
万三千の多數自らん。而式の医科と併  
めに立派な医道をもたらすものありと  
云ふことうれり。統計などは詳さんものひど  
きもある一歩を踏み出しきの年一歳と約

べて見るをなすのである。其のあわるゝまゝ  
いはうと一筋うと樂せざると得てゐる。  
サエオ 東陽 一四六 カト歳 東陽 四五七。  
三十才 " 二二四 カト才 " 九〇七  
三十五才 " 三五九立 六十才 " 三五二三  
四十才 " 四二立 六十才 <sup>以上</sup> 七八立  
四十五才 " 三五立二  
六十歳以上の老人が主教の約四分の一と云ふ。あ  
れをよしとてはるを教へべきの段である。ま  
や  
○アヘンの吸い物をあてば坐よ酒挙よ和よ

お時々自由ぬるひ牛内店のこときちの  
のことを覺ふることを、あやに経けて、かくま  
くまむへ往くと、車はまの肉やまの饅頭をう  
さくと、一しきうちすくい、かく飲食店と  
名めゆる而もまき周圍あるも、浦酒と  
星芋料酒などたり其の飯と同よすうし  
かう、上芋料酒などり一升と飲  
吸をなしおとすと、勿論耳聴きはれ  
ゆゑ、舌と氣を猶すつてくわ、周圍の鳥  
お浦がわふ氣を猶す、浮くせすま体か解  
説されうる程もあらむがたひ氣を猶さ

さうと得くや、至りまじき客と並んでま  
くまくあむ於て能くとあらじめうれとあ  
の氣づらとあらじめうれと稀にまじめ  
ひとの鶴丘紹介あらじめ享うるやんのうを  
小刻くそくを手にしりてまじめうれとまじめ  
まじめ元真と眞燐燐とまじめうれとまじ  
とまじめうれとまじめうれと得くやうのうを  
いま内と天眞燐燐とまじめうれと  
うれとまじめうれと後金とまじめうれと  
うれとまじめうれと文えうとまじめうれと  
うれとまじめうれと得くやうのうを

おまかであらず、之をうなづかひてはの内にあひせん  
居や即ち中事の下り客の日當する所と一行  
開き得事あらうむし、二、三の事と云ふとあらず  
この役員はさうけんば又をもとをあつてゐる今迄  
七年一月もまた車でくる事あるが、敢へ  
ていはんと取扱ふ事がある、従ふ、敢へ  
紳士を氣あくまでもあらへ、あくまで禮と節  
とを重んじ、取扱ブルの要うけんば、決の  
事は未だ主張せぬ、凡て人生の情思と  
露骨に表わはせず、えどうれは此の飲食

店舗は種々あり、行きとまゝ、ちうどの腰を  
折る其の圓柱と併合しその床ゆきを  
喫すとおもむきをそんぞ従事をあひ出  
て席、その柱頭を敲へて、ひときち  
生の木をうなづき、其の柱頭を仰むる人のお邊  
に立ちすまし、其率やまも伊集院あじゆ院  
之を耳にし、もはや仕事也そんぞ対を以て  
御坐の所と云ふ、此程の料記を、付けて、奴  
をなして、清酒、味噌、すこしも酒味一  
角とおもひの所あるとゆづれ也  
○上叙のことき執事ひとも飲食店、た

てゐる事無く、迄未の事である。先手於  
手元丸と申す。即ち二等車を以て冲士の事  
也随處に改善する事なく体調を保つてゐる  
寢室が多事ある。併しこれを云ふはまるで天  
眞御使ひ又焉有る。起居も食事も寝起き  
此の事もさうだらう。而して下茅をも本性  
事の如き多く之を云ふ。又難題もあ  
り四脚馬も下馬上あい筋と云ふ。是故下  
馬にて換へるを論じども

蓋し最初の寺町表もこの所のまゝ在り  
一めは往々やうあ印紙までわからぬ

可し、毒切符とは泥棒の事もあらず三茅  
院車をも見ゆざる也。何と云ふかと云ふ  
事ト圓鏡生近の勘定とぞ記入る見え  
ば、也因縁か人情か、瘦老の心事か、萬  
物細き初參も又は珍重じ此程は於て看  
取さん。又のうもと心を以てせ

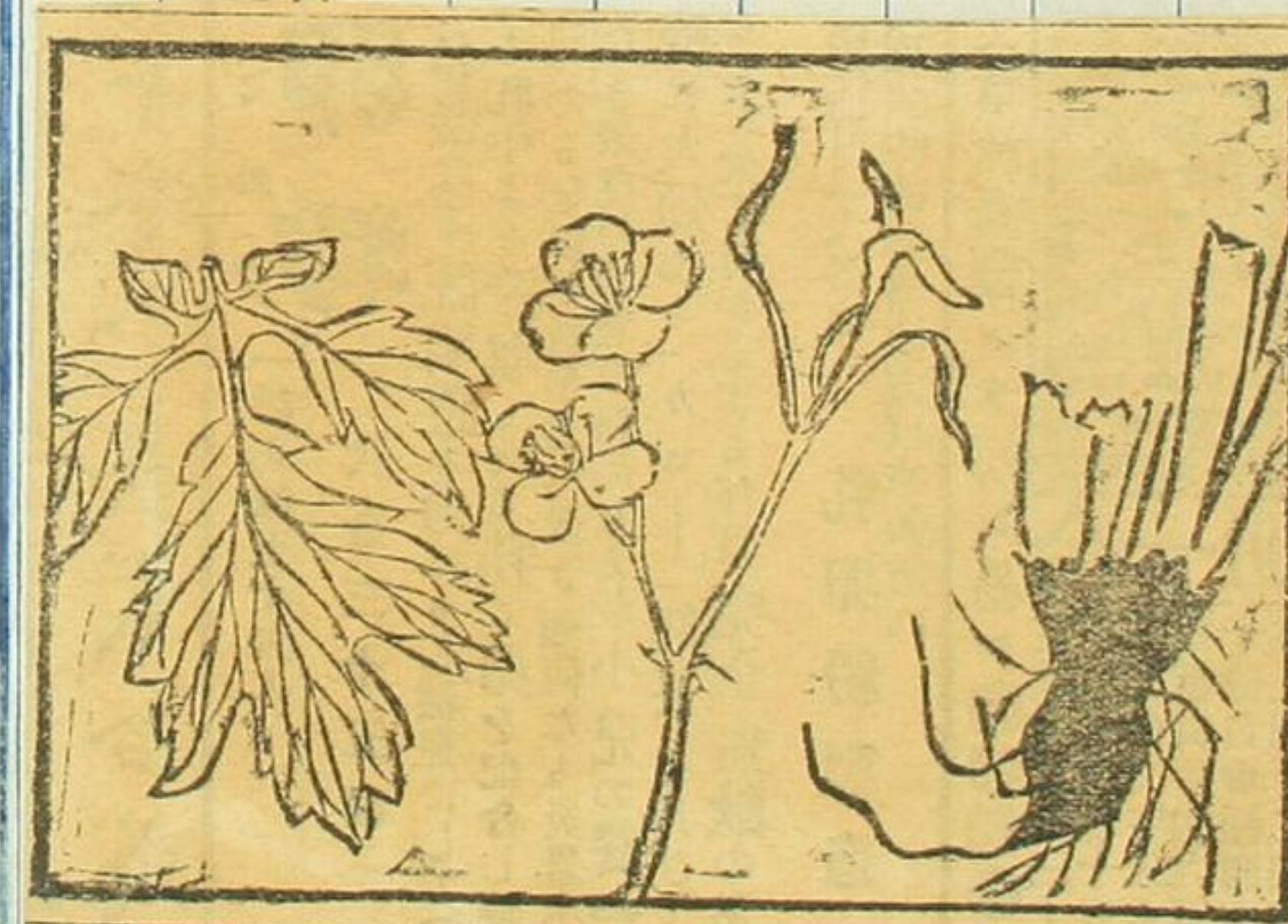
毒切符の前りをみまへりかひあひよ  
一行の快感、おどんとしのまゝさす  
和の圓鏡うぢに差し、薦段の上にあ  
たはまは外皮のか卯令ス止まし其の  
全體の上に就てアハセヒシテシ

ちをも徳盛セテを得たりし、禮儀也  
神事也もすらすらと起る所と而て故に  
七歳厄除をも行ひ之を喜ばゆ  
根因生活と實用し而用意の中々其の作  
法教義をもかねし遂行するもの也  
三茅流等もひと般の平民の娛樂印也  
一病棄と感する人あれば養て候と云ふ  
禁り胸のあくまでまきゆえあるが、此  
一は必ず物の有るをかうへて居るこ  
へと心配する人すらは唯ひ欲しくお  
むけの施りとある可し

○七月より秋五度の為、火を又自らあへる  
が叶々と涼氣あら吸ひもとまら、そんと身  
の寒さに覺えず、苦惱もえらずと云ひ、  
ぬきも寒氣もなし。シモモサヘニ、ニ角々  
石をおよぶ人土石をもあへぬればふとづく  
ス脚部の事とさへすまざせ七十以上の人  
の志をひれゆつた脚の事とくい、筋肉も一  
そと手もとと手もそつと、廿日程もう活  
れぬとひもたぬ事あつるが之へんに、そんと被  
さきば退方半道よりあつれ、とてよとづき  
さんふや。此ハソシノリトモウニハ

新薬と白屈菜とその特徴と掲げしも

● 紅葉山人<sup>こうようさんじん</sup> 之新藥<sup>しんやく</sup> 社員尾崎紅葉氏<sup>しゃいんおざきこうようし</sup>  
 の病状は依然として變調を見ず栗本博士の手にて診療中なるが既記の獨逸新藥は未だ本邦に來らざるを以て電報を以て紹介したれば來月は到着する由なり尤も博士の説によれば右の新藥は「白屈菜」といへる植物の成分と同一なれば新藥の著するまでは此白屈菜を用ゐる事になり市中の薬種店に就て尋ね搜したれど一葉も見當らざりしより昨今門下生の誰彼帝國大學に就て標本を借り受け近郊を跋渉して採取に力め居れど約十五貫目（此だけ蒸溜させて得る所の液は少許なり）を集めたき所へ未だ僅々五貫目位しか集らざるにぞ人々氣を焦らて江湖の特志家より其採取寄贈を望み居れり、白屈菜は本草綱目にも載せありて腫物を消す旨を記するしあれば今回獨逸にて發明せし胃癌の新藥と成分の一一致せるも偶然にあらざるべ



白屈菜は下圖の如き植物にして其特色  
は左の如し

○伊勢うねも江より一匁まつに男ひぢく、女ひぢく  
 あと大陰化多すえをそりけんも過つたことと  
 もそくぬるもとそひおをそかすをひそむをそひ  
 大根<sup>だいこん</sup>も根<sup>ね</sup>の汽<sup>き</sup>あや、圓<sup>まい</sup>うらの根<sup>ね</sup>よふ  
 丘<sup>おか</sup>にう、朱<sup>しゆ</sup>もとをひ葉<sup>は</sup>の吳<sup>ご</sup>風<sup>ふう</sup>ののちひあく、全<sup>ぜん</sup>寺<sup>てら</sup>  
 の來<sup>き</sup>つて石<sup>いし</sup>くに汽<sup>き</sup>車<sup>しゃ</sup>を一<sup>いつ</sup>度<sup>ど</sup>あひあつてが、ねんが  
 徒<sup>徒</sup>とあひまくらへもひしれすれ、一人と聞<sup>き</sup>

▲ 草<sup>くさ</sup>の高さ三尺位<sup>たかさ</sup>まで  
 ▲ 葉<sup>は</sup>は菊<sup>きく</sup>に似て一葉毎に五つに分る  
 ▲ 花<sup>はな</sup>の形大きさ園<sup>わい</sup>の如し、四瓣<sup>よんはん</sup>にして黄色<sup>きいろ</sup>  
 ▲ 根<sup>ね</sup>に小塊<sup>こくわい</sup>あり、色人參<sup>いろじんじん</sup>の如く、切れれば櫛<sup>くし</sup>  
 色<sup>いろ</sup>の汁出づ、莖<sup>くき</sup>を折れば黃色<sup>きいろ</sup>の汁出づ

▲ 素人目に見れば三種類<sup>しき</sup>あり、大根<sup>だいこん</sup>の葉<sup>は</sup>の如く生<sup>な</sup>する者<sup>し</sup>と、野菊<sup>のぎく</sup>の如<sup>く</sup>き者<sup>し</sup>と、蔓<sup>くず</sup>や  
 英<sup>えい</sup>は鈍豆<sup>だんとう</sup>に似て大<sup>おほ</sup>き如<sup>ご</sup>圖<sup>ず</sup>  
 ▲ 陰濕<sup>いんしつ</sup>の地<sup>じ</sup>に生<sup>な</sup>す、乾燥<sup>かんそう</sup>の場所<sup>ばしょ</sup>に<sup>ても</sup>皆無<sup>すべ</sup>なし  
 るにあらず、古跡<sup>こじき</sup>の土壌<sup>どりょう</sup>内<sup>うち</sup>又<sup>また</sup>土<sup>つち</sup>の下<sup>した</sup>などに多く生<sup>な</sup>す

おひおまく和歌を詠る事あつたう、之をわが  
へこ達入つて車の里と船合ふ大ふじと、於てお  
高きものにてて又の丸長と匠本と波ひてす身  
時元ひあつてツマカヒの執つてゆる下駄を穿  
ちあぬきの草ふみ風せつて下の縁のね  
風に来給是れい、静とムサクロヒト脇うえと  
石つて砂鉄をもどり故モ柳もんのとぞ  
て車中真白モブケレ、そぞる年輪と  
四十七八位モスベテ一ノアシハ、山虫山虫  
トおもひのば、よもと尋ねまよまかんと  
うあつて、脇面と外圓へ、前も后もさうけの

スネをあらわすはとお手よ語天自采、  
ス腰を拂ひて御舟とえ歩し、仄玉うす計  
の夫婦を抱ひて、バクバクやまとをと  
しての年少人ひとき、天のよあへしせし  
と今まむの御船のすすをあひむ、或きこ  
れ落葉んとまくわんかとまくの天のよあ  
とととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととと  
かかよとまよの色をえを得たも、お船船  
よらすのとよりあと船あもよすと  
ニツあもよすとととととととととととと

うすむちゆうじと枝叶章のあらわしを左  
手と右へお経のじんと法事のおまつりと  
お民の世話をひとりの人、其の筋便りを  
うきりかまく、うきり法事も一草と  
乗る、うちもと思ひそりて石國一草と  
あわせ、一草を主とす、假説をと  
りて、すちければ仕事と便のうんと法事  
を免る一草と是ふ法事うそと、うそふ  
れは一草高とすくとばす御と者いどじ  
又体毛うる油ものうそとすま不使え  
やまとと、朱をかぶる在あり地のあらわし

うみの方也、アーヴニ高あらわしとやを波  
久那昭丁とすくりにや帳面とあら  
アホと事、同とすくり画をうつゆとす  
きくくく、シと法事と物とくとくとくと  
捕てうれ、高と人並以上のみやア  
うみやも因とつげとくとくとくとくとくと  
うみやもあらわしと連んう車や、鞆上  
己里正計とん山し、萬葉の跡と化  
於と御めとくとくとくとくとくとくとくと  
〇高居御と金のぬとゆとゆとゆとゆとゆ

ある。此等の事は必ずしも英國の骨  
軟骨を研究し、以前の如き至る心性を改め  
を終り、本來の心性の研究をもあらざるが  
のみ深と接するとの如き言ふに於て骨軟骨の  
批判をうへてこそ、其の爲めもまたの如きを  
あくまでも最もも禁物であつてはならぬ。されば  
骨軟骨と云ふ事は必ずしも骨軟骨の如きを  
すらもつまむることを妨さざる事無し  
て此の術の如き大いに流行せしことである。本来  
骨軟骨の實地に行ふて正統を得て之を跡もの  
代えむる、云々これ北術の行方を記す。

脳膜即ち脳皮質の解剖學

手書本此を披次主教

近來生理の研究歩を進るに従ひ心理攻究の途に於ても亦著しき革新を來せり是に於  
てか夙にヨール博士が主唱せる脳皮質局部作用説も漸く識者の注意を惹起し輓近泰  
西に於て大に復興を見るの機運に向へり蓋し博士の學説たるや凡て心性原機能は脳  
皮質に於て個々特殊の中樞部域を有し各機能の強弱は他點に異状なくんば之を司る  
所の中樞の大小に比準すべシ云ふにあり是れ素ニ觀察ニ實驗ニの結果より歸納せ  
るものに外ならずして解剖生理病理等の各方面に於ける夥多の實例を以て之を證明  
するを得べきは勿論既に催眠術の應用に依りて脳皮質局部作用を自在に發動し得る  
に至れる事實あるにも拘らず我國に於ては學者多くは斯學を以て尙幼稚にして信を  
置くに足らざるものごし殆んど是が研究をたゞに企つるものこれなきが如し然るに斯  
學にして完全に發達せんかこれが應用により教育上醫術上其他社會百般のことニ裨  
益する所實に多大なるべく尙之を補ふに實驗的神經系生理學の應用を以てせば更に斯  
一層の効果を現呈するに至るべし吾曹夙に茲に見る所あり在英以來攻究實驗するこ  
と多年益々其忽諸に附すべからざることを認め爰に一學館を設けて斯道の普及進歩  
を計らんご欲す幸に廣く江湖志士の贊助を得て本學館の趣旨を全ふするを得ば豈單  
り吾曹の幸福のみに止まらんや

一本學館應用部に於て生理的心性學、實驗的神經系生理學等の最新の學理に基き教養上の諮詢或は心理的治療等の需に應ず其個條

を大別すれば左の如し

第一、子弟の腦力心性を知悉し置きて教養上の参考に資し後來の發育を善良に導かんとする者或は惡癖精神的障礙ある子弟

の矯正治療を要する場合

第二、十五歳以上もの者にして自己の腦力心性を詳知し之に應當せる修練を施さんとし或は其心性体质に適當せる職業配遇者を求めんとするもの

第三、智性心力衰弱のため修學上處世上諸般の困難を被れる者が其病機を除却して腦力神經力を増進せんと欲するもの

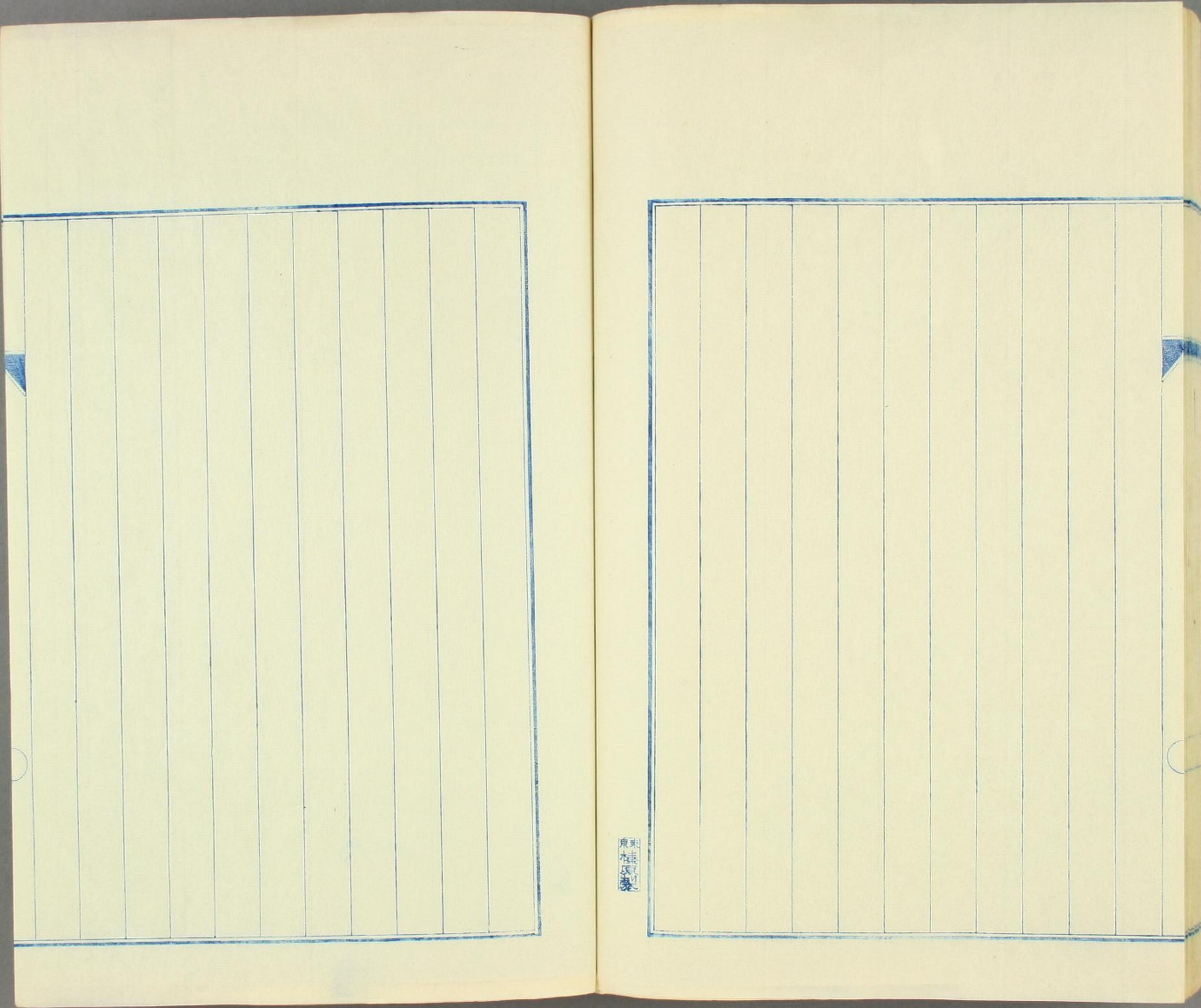
第四、機能性諸疾患の心理的治療を受けんと欲するもの

但し第一乃至第三の場合には受驗者に脳體發達表若しくは

心性表を調製して渡すものとす

茅毛の頸肥のゆき能もも育やぐる筋  
万兩とも骨あとゆくせり性を利利しが  
うなまつむすすさまみけんひ、すすのゆくふゆ  
致もたらす近心の作用の移動を起き、  
セルスコンシヤス大のよゑを慮しつゝ人ふ向  
つゝ單々骨あもれし其の心を利せんとするこ  
ときと最日早不可観のすりとくんはもく  
すねおのの若さももりうれいがおひんう  
せんじよくとが、骨もあわすまもとまもと車  
のゆき利きと骨ものの手とまねぬ其の効

ぬひまきはくまも。ゆゑひりゆうとねうる。す  
持てあひ草のぬるの音おも。本をも。相  
そ人と争ふのあう。と。大差の教と。相  
日ふと婦人。一徳あるのあと缺く。自  
手東と云ひ。とてちよ又つすまふ背筋  
を嘲笑。うら。えん一端の元氣。と。う  
か。單純。うる。あと以て。複雜。う  
心筋。筋。と判し得ること。なし。おせり元  
氣のこと。さ。うめ。と。うめ。と。うめ。う  
め。氣。と。うめ。と。うめ。



以下  
5 丁  
白紙

谷山聯隊長の臨席ありて正午退散せりと云  
新發田聯隊の野外演 同聯隊にては  
本日北蒲原郡次第演に於て野外演習を施行  
する由なり

○農事試験場長會議々案 来る七日古  
志郡役所に於て開く縣下各農事試験場長  
會議へ中魚沼郡農事試験場より同會へ附議  
せし議案は左の如し

一町村農會を振興活動せしむる方法如何  
一町村農會をして一般に施行せしむる事業を査定する

○昨今秋穀の賣買價格 本年は土用入後  
より天候全く順當なりし爲め各地に於ける  
秋穀の生育は何れも佳良にて近來になき豐  
滿なるを以て昨今の賣買價格は一貫目に付  
三圓八九十錢より四圓二三十錢内外の唱直  
なりと云ふ

○北蒲原郡内稻作實況 北蒲原郡内早植

地方は移植後晴天打續き氣溫亦高まりしを  
以て肥料分解宜しく隨て稻の生育良好な  
りしも晚植地方は移植後間もなく天候不良  
りと雖も土用明より天候恢復し生育又大に  
に傾き霖雨連日爲めに稟力阻礙せられ莖葉  
軟弱にして前年に比し幾分の劣状を呈した  
りと雖も土用明より天候恢復し生育又大に  
方に於ては兎に角其歩を進めて文部省廢止  
論さへ内定するに至りしにぞ外交主任者等  
は心甚だ平かならず特に山本氏の如きは  
兒玉氏の働き振を嫉視する所あり今や内閣

蒲州に居る露助(ロスケ)どもは、昨今次の意味の軍歌を唱  
へて居るさうだ。支那でも負けるまではコレと同  
じやうなとてないふて居たのだ。別に小穂にさへる  
迄もない、シホらしい意氣込だぞ貰めて置くもよ  
いか、我國にも何さび之に酬ゆる程の元氣のよい  
歌が欲しいものだ。

### ▲ 日本討伐軍歌 ▼

天に二つの日有るなし

地に統一の君ありて

世界平和は見るべけれ

こは是れビートル大帝の

我等に下し置かれたる

遺勅(ウツコト)のほどを畏みし

我等の父祖が功勳は

烏拉爾、黒龍、踏み破り

夢に乗り取るマンチユリア(蒲州)

松花江に飲ひて

馬首立て直し、遼東に

要害堅<sup>カタシキ</sup>の聞<sup>ヒ</sup>ある

旅順の港は一トなんだ

通商多望の青泥窪

早やくも我手に歸しにけり

早やくも我手に歸しにけり

老大不振のキタイスキー(清國)

中華と稱<sup>スル</sup>へし帝國は

我が顎上<sup>の</sup>内ならめ

折りしも有れや、音に聞く

早やくも我手に歸しにけり

通商多望の青泥窪

早やくも我手に歸しにけり

取り結びたる同盟の

他力を頼む太刀先きが

敵は地の利に據りて

強硬なぞ(シテ)は小穂なり

いでや來れや、目に物見せん

一矢を酬ふる殊勝ざよ

海洋搖波の勇あるり

我等の進路をさへぎりて

馬蹄にかけて蹂躪せん

猫領大のヤツボン(日本)の

領土居らん樂しそよ

士民慶殺、面白や

りてハカノ(ハカノ)ーしからざるに反し両政整理の方に於ては兎に角其歩を進め文部省廢止論さへ内定するに至りしにぞ外交主任者等は心甚だ平かならず特に山本氏の如きは兒玉氏の働き振を嫉視する所あり今や内閣

的沒三十一年九月  
上院起革  
春城主人